書評　『人は何を手放さなかったか―佐伯安一が観た富山の情景』
『散村地域研究所研究紀要』第 43 号

砺波散村研研究員　白江秋広

佐伯安一さんは、富山県の民俗と歴史の分野で大きな業績を残していかれた大先達である。その佐伯さんは、また、膨大な写真資料も残された。

今、電子媒体で残っている写真は、昭和２８年から３９年までの写真帖(ネガ無)から写し直された３２６枚と昭和４０年以降のネガフィルムから読み取られた電子情報画像１７,２３６枚の計１７,５６２枚である。しかしながら、佐伯さんが残された各写真・ネガには撮影年月日と内容を記した目録が残されているが、目録にあるネガの内、『市史』等の関係で他へ寄付されたネガ、電子情報化されていないネガフィルムの分の枚数が約３千枚近くあると推定される。つまり、珠玉のような写真記録が２万枚を超えていたことになる。これは、文字通り驚嘆に値する。

ある時期、尾田武雄さん宅を訪問すると、きまってパソコンで佐伯さんの写真選びと、その写真に対応するキャプションとして、佐伯さんの著作から文章を抜き出す作業に没頭されていた。膨大な写真の佐伯ワールドから選び取って写真集を出すことは、愛弟子である自分の責務であるとの想いであったろう。

かくして選ばれた４００枚余からなる写真集は、単なる記録ではなく、佐伯さんの眼差しで写された味わい深い富山の情景そのものである。

なかでも多いのは、民家の写真である。ムラ、マチ、山で人々が暮らす上で一番ベースとなるのは、「衣・食・住・」の内、住居である。佐伯さんの取られた民家の写真は、屋根形等の類型化を記録するだけでなく、そこに住む人々の生活実感が写されている。―例えば、1 枚の写真は、圃場整備前の小川が流れており、川岸には柳やハンノキが生えている。小鮒を釣る淀みもありそうだ。川は流れて散居村の農家前にたどり着く。民家の記録―カイニョに囲まれた前流れのクズ屋の全景。前の田圃には、大きな藁ニョウがいくつもあるー藁工品用の材料であり、売却して得る貴重な現金収入の元―ニャーバ(庭場)にある小さなニョウは、コシバ(小柴)かスンバ(杉葉)用であるーアマに上げて保管し、適宜シバヤ(柴屋)へ降ろして、燃料とするー竹竿には、洗濯物がオンパレードに干してある。玄関の広間から口座敷へかけて外には、大八車が横たえてあり、柿木の前で、家の年寄りが佇んでいるのが見える。屋根は、母屋も前の下屋も萱葺きで、東前側は障子戸、南側に板戸が入っている。冬期間は、吹雪が隙間から屋内に吹き込まないように干した萱の束がずらりと立てかけてあったので、昼間もうす暗かった。さらに、写真は、前の屋根型だけではなく家屋の東西南北からそれぞれ撮ってある。更に中に入ると、囲炉裏を囲んで当時の生活面が写されている。売薬の箱、国旗入れ、コメガラト(米櫃)、食器箱等が積み上げられている。現代の個室主体の間取りとは全く違う。家族が寄り添って生活する空間であった。

さらに、写真の推移は家が解体されていく工程が克明に写されている。古草屋根は萱をはずして裸にされると、細丸太が縄で縛られ屋根形が組まれている。その骸骨のような骨組みは、広間の枠の内の豪壮さから想像できない。

富山県は、入母屋(一番多い)、寄棟(となみ平野に多い)、切妻(五箇山等)と日本民家の草屋根の３タイプが揃っている。そして又、屋根型は上方の影響を受け、間取りは広間型が基調で東北に近いとされている。佐伯さんは、それぞれそのタイプ民家を昭和２０年代から、丁寧に且つ執拗に撮ってこられた。今や他では見られない貴重な写真・記録が残されている。昭和２０年代では、農村の民家にとどまらず、寺の御堂、神社、作業小屋等、萱葺き屋根がほとんどである。戸出の街並みの屋根も、石置き板屋根ではなく萱葺き屋根が写っている。

全体として写真記録による佐伯ワールドからは、学問の鋭利なメスで解剖された社会生活の断面ではなく、民俗学の目で見た質朴な生活感が滲じみ出た世界への共感と、懐かしい既視感(デジャブ)を色濃く感じたことを申し添えておきたい。―文字通り、「百聞は一見に如かず」―